

ビデオ 通信

2013年
3月14日(木)
No.3665

毎週月・木曜日発行
1ヶ月 ¥11,550 (税込)
発行：飯澤剛
編集：齋藤浩一、齋藤知香

ユニ通信社

東京都千代田区神田司町 2-10
神田司町国土ビル 2F 〒101-0048
TEL : 03-5256-1521
FAX : 03-5256-1525
E-mail : vt@uni-press.net

DEFENSE

“今の時代” にマッチした VFX & Mixer のフリーランス集団 Smoke 2013 で新しいワークスタイルを確立

DEFENSE

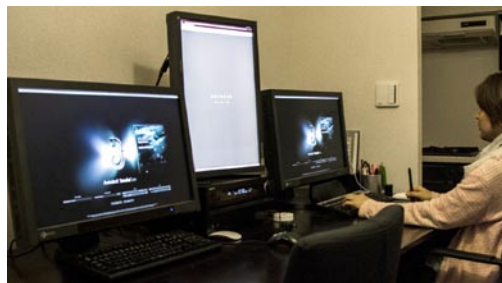
VFX のスペシャリスト集団「DEFENSE」が、2012年10月に始動した。会社という形式を採っているが、メンバーは基本的にフリーランスの VFX Compositor と Mixer で構成されているのが大きな特徴。また、会社としての編集室を持たず、それぞれが所有するフィニッシングツール「Smoke 2013」やポストプロダクションに向いて作業を行うなど“Nomad”的な活動を展開している。メンバーは川村大輔氏 (VFX Supervisor/Compositor)、格内俊輔氏 (VFX Compositor)、佐々木賢一氏 (VFX Compositor)、小松徹氏 (Sound Mixer) と、(株)家元に所属する齋裕幸氏 (VFX Compositor) と荒木洋平氏 (Post-Pro Producer) の6人。

キーワードは「Smoke」「クラウド」「SNS」

DEFENSE は、編集からコンポジットまで全ての作業を一個人で行える環境を用意したことで、ポストプロ中心になりがちであった編集フローに新たな選択肢を増やすことを実現した。 “会社” というカタチではあるが、自らの編集室 (ハコ) や事務所は持っていないほか、スタッフは “会社員” ではなく、基本的にはフリーランス。マネジメントだけを会社としてまとめている。

代表取締役の川村大輔氏は「最大のポイントは自由なスタイルが採れること。これまでフリーランスを使うにはハコ+人間へのコストが必要でしたが、「ハコを使わない」という選択肢は、少なくともこれまで以上の金額と同等もしくはそれ以下で作業が進められる。クオリティに関してはもちろん、それなりの人間を揃えていると胸を張って言えます。また、コンポジターだけでなく、ミキサーがいるのも大きな特徴。「MA までを一本の作業」と捉えることで作品の質も左右する、大きなプラスの効果だと思います」とする。

一方、格内俊輔氏は、DEFENSE のような新しいワークスタイルが誕生できたキーワードとして「Smoke for Mac の登場」「クラウドの浸透」「多様化した SNS」の3つを挙げる。〈行動を共にすることは少ないですが、Facebook やチャットなどでみんなとコンタクトをとりながら常につなが



っている。自宅でも必要な連絡ツールは豊富にあるし、ファイルのやりとりも可能で、自分にとっては自宅の方が作業効率上がるのではないかと考えています。もちろん、打ち合わせなど実際に顔を合わせることも重要ですし、今の時代ではまだ、撮影の現場に足を運んで的確な指示を行った方が効率的かつ効果的だと思っています」と話す。



Smoke は“コミュニケーションツール”

DEFENSE の活動は、ポストプロに出向く従来のスタイルに加え、自宅でも作業を行えるユニークなワークスタイルで展開している。

Mac をプラットフォームとした Smoke の魅力について格内氏は〈AfterEffects や Photoshop、Illustrator 等の外部ツールが同時かつ同じプラットフォーム上で動くこと。データのインアウト、やりとりもすぐできるので、フレキシブル&スピーディに物事が進むし、SNS コミュニケーションも容易にとれる。とにかくマシン 1 台で完パケまで持っていけるのが最大の利点です。全てが集まる「HUB」となって様々な人と会話ができる“コミュニケーションツール”だと思っています。Smoke がソフトウェアのみで低価格に提供され、私達のような個人でも買えるようになり、フリーランスや小規模プロダクションと横のつながりが広がっていく。実際、Smoke によって人々とのつながりが一気に増えたと感じています〉とする。

一方、川村氏は〈Smoke for Mac がなければ DEFENSE のようなワークスタイルは実現しなかったと思います。Smoke は元々編集機能が強いソフトですから、私たちコンポジターが苦手な編集を頑張って行うより、オフラインエディターが Smoke で編集し、そのプロジェクトデータで私たちが合成するというフローも、今後、非常に有効だと思います。技術の進歩は「使われてしまう」のではなく「便利に使ってこそ」意味があると思っています〉と話している。

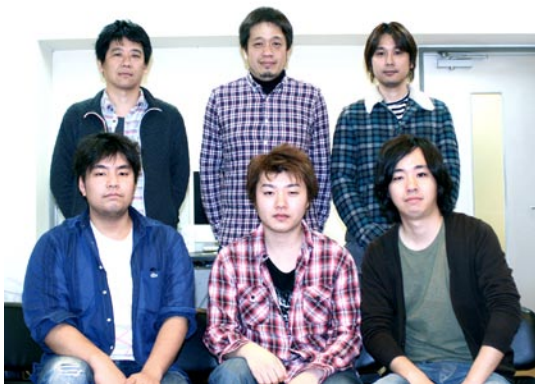
今のスタイルは最終形ではない

格内氏は〈クライアント、広告会社、制作部、撮影部など、何かがわからない状態で物事が進んでいくのではなく、みんなが同じ意識下のもとに進んでいくために、DEFENSE が一役買えないかと考えています。全体的にスキルアップしていけば、さらにイイものが作れるし、違う視点から様々なアイデアも出てくる。DEFENSE が核となって、様々なカタチのコラボレーションを進めていきたいと考えています〉とする。

川村氏は〈今、ポストプロでは CG から仕上げまで全てできる所謂「ワンストップ」形式が当たり前になっていますが、DEFENSE は、ちょっとだけ尖ったチーム。そういう人間が集まれば、きっと新しい物づくりができていくのだと思います。それぞれの得意不得意を有効に使ったものづくり = DEFENSE だからこそ、といった仕事をしていきたい。CM をメインにミュージックビデオ、映画など、コンテンツの種類は問わず、全ての映像コンテンツに関わっていきたくと思っています。ただ、今のカタチが最終形態であるとは考えていません。「将来的にどう膨らんでいけるか」を模索するために、自由に動けるような状態にしているだけ。「時代にマッチするワークスタイル」に対して、常にアンテナを張り続けていきたい〉と話している。

◇ DEFENSE <http://d-fence.jp/>

DEFENSE のメンバー



(後列左から)

●小松徹氏 (Sound Mixer) : フリーランスの不得手になりがちである情報、仕事の共有ができることは大きなメリット。仕事でも、実際に川村の仕事で紹介してもらったディレクターとの関係が続いたりして、相互の関係性もできるようになった。とてもいいカタチだと思っています。

●川村大輔氏 (VFX Supervisor/Compositor) : 理想的なのは「撮影現場に行ったら、みんな

知り合い」といった状況。色々な人達と知り合えるよう、触手を伸ばしていくためには、“会社”という枠がない今の状況が、非常にやりやすいですね。

●格内俊輔氏 (Compositor) : 仮に今後、チームの人数が増えていったとしても、既存のポストプロクのようなスタイルを採る気はありません。その時代にマッチしていて、自由な動き方ができるようなチームでありたい。海外の真似ではなく、常に二、三步先を行くような「日本のやり方」を作っていきたいと思います。表に出てこないだけでスゴイ人は日本にも沢山いる。そういう人を根こそぎ引っ張り出したいですね。

(前列左から)

●荒木洋平氏 (Post-Pro Producer) : カメラ機材、データ形式、ソフトウェアも多様化し制作陣も把握できなくなってきている。クオリティと料金両面でフォローアップできるポジションとして、力のあるスタッフと一体になり積極的に制作フローに参加していきたいと思っています。

●佐々木賢一氏 (Compositor) : 最近では企画から介入させてもらえる作品もでてきてより深く作品に携われるようになってきました。また、他メンバーとジョブを共有することで更なる技術向上に努めています。

●齋裕幸氏 (Compositor) : 私は、DEFENSE でありながら家元という編集スタジオに所属しています。特殊な立ち位置ですが、これを活かしてみんなのパイプ役になればと思います。